

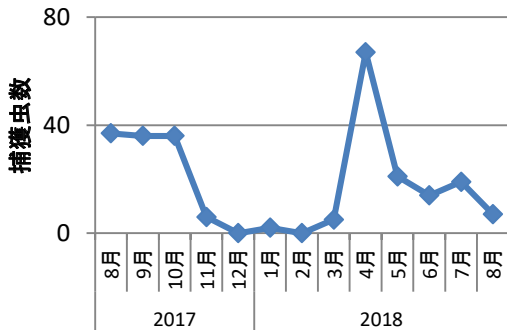
ヤノネカイガラムシの在来天敵の評価

ヤノネカイガラムシの天敵として、中国から導入されたヤノネキイロコバチとヤノネツヤコバチの2種の寄生蜂が有力である。在来の天敵として、ヒメアカホシテントウとキムネタマキスイの2種の甲虫が知られる、キムネタマキスイは、ヤノネカイガラムシの天敵として検討された事例が少ないため、天敵としての評価、各種薬剤の影響を検討したので、結果を紹介する。

キムネタマキスイ(写真)は、カイガラムシ類の捕食虫として古くから報告され、特に、マルカイガラムシ類(クワシロカイガラムシ等)に対しての天敵として知られる。

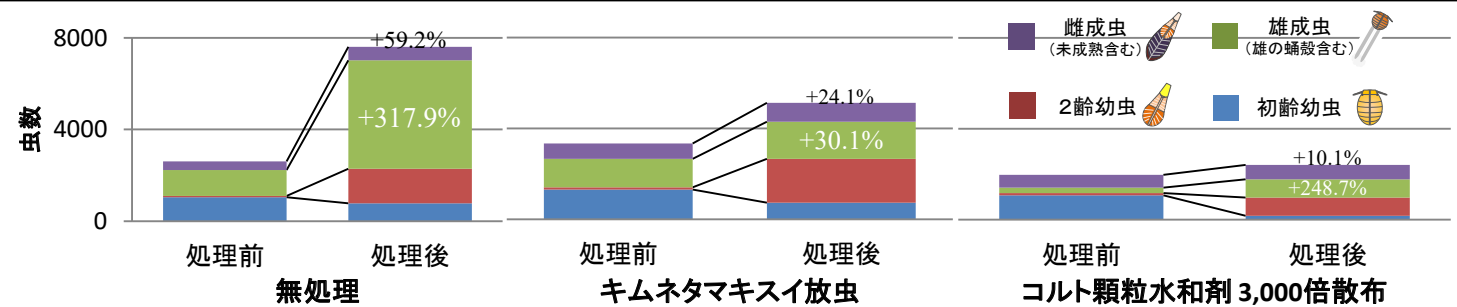


キムネタマキスイの発生消長

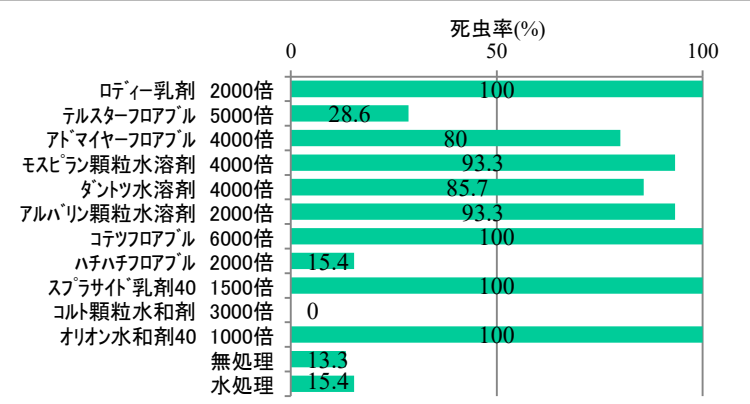


注1) ビーティング調査の結果(5回/5枝/樹、センター内伊予柑)
 注2) 2017年8・9月は6樹、2017年10月～は10樹
 注3) 2018年7月中旬に調査樹へコテツFL6,000倍を散布

キムネタマキスイの放虫によるヤノネカイガラムシの密度抑制効果試験



各種薬剤の影響



注1) ゴースを底に貼った1000μlチップにキムネタマキスイ成虫4~6頭ずつ入れ(1チップ/反復として3反復)、先端にゴースとプラスチックリングでフタをし、各種薬剤に10秒間浸漬
 注2) 処理2日後に、虫体の生死を計数

注1) 21°Cにしたガラスハウス内で、ヤノネカイガラムシを齢期別に8枝/ポット(伊予柑)について計数した。枝毎に逃走防止用のゴース(幅16×長さ23cm)をかぶせ、その中に、キムネを3~4頭放虫した。放虫46日後に、再度、ヤノネカイガラムシを計数した。
 注2) 増減率 (%) = (処理後虫数 / 処理前虫数 × 100) - 100

キムネタマキスイ放虫によってヤノネカイガラムシの密度抑制に効果が見られ、特にヤノネカイガラムシの雄(写真2)に対して高い抑制効果が見られた。このことから、キムネタマキスイは、ヤノネカイガラムシの天敵として利用可能と考えられた。



薬剤の中には天敵へ影響の小さい種類もあり、これらの剤を選択的に利用することで、天敵類の寄生・生存率が向上し、ヤノネカイガラムシに対する密度抑制効果が期待される。